

【横浜ダンスコレクション EX2012 Competition I 総評】

横浜ダンスコレクション EX2012 コンペティション I への応募総数 8 カ国 140 組、新しい才能との出会いを楽しみながら参加した。

ここで見た多様な姿、美意識や表現法の豊かさから、コンテンポラリーダンスの裾野が一層広がったという印象を強くした。

一呼吸の間の瞬間、瞬間から紡ぎだされる身体対話と静寂が聴こえる岩渕貞太 / 関かおり作品「Hetero」。寄り添い、離れ、密着し、離れ、寄り添う様々な位置を繰り返しながら二つの身体の間の変容を描く鈴木優理子作品「BORN / 2012」。

内と外、そして、それぞれの間から身体の宇宙を探る作品意図を観客にしっかり届ける技法、構成力が光る皆藤千香子作品「Schattenlinien / Shadow lines / 影の中の線」。

また、音楽や椅子、ペットボトルなど道具の選び方、配置と空間構成のセンスが印象に残る荒悠平作品「一人より二人」、次回作も楽しみである。

裾野はこれまでにないほどに広がっているが、既成の枠を超えて行ける独創性、ダンサーと観客との間に何かが生み出され変容していくような強さが、新たな地平を切り拓いていくのだろう。

身体と誠実に向き合う若い才能からダンスの新しい時代が始まろうとしている。

小野晋司 (青山劇場・青山円形劇場 プロデューサー)

巧みでも訥弁でもその人自身の言葉(ただし決して独り言ではなく)で語りかけてくるダンスは届く、ということを変えて思う。

皆藤千香子作品の洗練された雰囲気、岩渕貞太 / 関かおり作品の緊張感とそれを実現したダンサーの力、鈴木優理子のきらっとした目力、踊り終えた荒悠平のやりきった表情 etc、多くの瞬間が心に残る。

前回のコンペティション終了の約1か月後に起こった東日本大震災。

その影響はどんなかたちで現れるのだろうと漠然とした不安を抱いていたが、映像での一次審査が始まると、もやもやしているわけにはいかなかった。スケールも成熟度もいろいろだが、今回も魅力のある作品は少なくない。前回同様、大いに悩みながら本選に残す作品を選んだ。

受賞作品の中で皆藤千香子「Schattenlinien / Shadow lines / 影の中の線」は、美術とダンサーの動きの関係など、広い視野で構成された作品の完成度が他とは一線を画す印象。

鈴木優理子「BORN / 2012」は、2人の女性の奔放な動きが独特の面白さ。

岩渕貞太 / 関かおり「Hetero」は、開始の瞬間からその場の空気が密度を増したのではと思わせるほどの緊張感に満ちていた。演じた関かおりと目黒大路の動きの強さも驚異的。最後まで途切れないその強度は、今回の参加作品の中でも圧倒的だった。

その他にも、荒悠平「一人より二人」の奇妙な味や、横山彰乃 / 高橋萌登 / 泊麻衣子 <CRUSH THE TYMKS> が「星の降らない夜明け前」で見せたみずみずしい感性、ダンサーとしても魅力的な酒井幸菜「スピカ」の躍動感、Lee Ji Hee(イ・ジヒ)「Shadow me」に見る屈託ない身体之美しさなど、多くの収穫があった。

新藤 弘子(舞踊評論家)

昨年に引き続き、今年も審査に参加させていただいた。まだ見ぬ才能、まだ見ぬ作品に立ち会える絶好の機会だ。簡単ではあるが、最終審査に残った12作品について、私感を書き留める。

皆藤千香子の「Schattenlinien / Shadow lines / 影の中の線」は、タイトル通り、空間に立ち現れる光と影、そこで動く身体をストレートに表現した作品だった。ダンスにおけるこのような抽象表現、というか即物的なアプローチは、モダンダンスの発祥以来、数多くの試みがなされている。本作品は、そうした歴史的コンテクストを踏まえると、空間における光と影と身体について、残念ながら新しい発見、もしくは新しい視座を示すような驚きは得られなかったように思う。ただし、本作品は本来、床が白いダンスマットを使用していたこと、また、上演直前にダンサーも急遽変更になってしまったことなど、振付家の意図が十全に反映された上演でなかったこともあり、再度、振付家の意図を充分に反映した上演がされることを期待する。

Lee Jae Young(イ・ジェ・ヨン)「The Rest」は、バスケットボール(実際に使用されていたのはバレーボールか?)に見立てた球(ボール)の運動に想を得た男女によるデュオ作品。残念ながらアイデアからの飛躍はみられなかった。舞台上でダンスがダンスとして成立するためには、そこに審美的な意味であれ、社会的な意味であれ、もしくは共同体、もしくは個人が希求する機能的な意味であれ、何かが確かに「存在」している、と感じられる瞬間、もしくは時間がないとまずいのではないだろうか。

そういう意味で、たまたま韓国人により創作された他の2つの作品、Lee Ji Hee(イ・ジヒ)「Shadow me」、Kim Jung Gi(キム・ジュンギ)「SKIN」も、ダンサーの技術には素晴らしいものがあるにも関わらず、どれもそうしたブ

レザンス(存在感)が弱く、あまりにも無邪気に、表現としてのダンスの可能性を信じてきってしまったところに問題があるように思う。

同様なことは、横山彰乃 / 高橋萌登 / 泊麻衣子 <CRUSH THE TYMKs>による「星の降らない夜明け前」にも当てはまる。KENTARO!!のスタイルに似ている、似ていないという、いわゆる振付言語のオリジナリティの脆弱さという点も看過することはできないが、それ以上に気になるのは「踊ること」もしくは「身体運動としてのダンス」の可能性と不可能性について、踏み込んだ冒険/実験を試みていない、ということが問題だ。踊ることの喜びは伝わってくるだけに、もっと遠くに、手が届くか届かないかのぎりぎりのところで勝負してほしい、と期待を込めて書かせてもらう。

石井丈雄の「無意味」という作品も、同様に物足りなさは否めなかった。が、彼の場合は、おそらく舞台作品としてのダンス経験はあまりなく、むしろライブハウスやその他別の機会で、いわば即興的なダンス・ライブとも言うような活動をしているのではないだろうか？

ダンスが、舞台や劇場にとどまる表現でないことも、また自明のことである。儀礼祭式の時に、ライブ音楽と共に、またたつたひとり部屋で踊られるダンスも、当然またダンスである。そういう意味では、当然のことながら、今回のような“場”では、ダンスそのものの「自律性(オートノミー)」の提示にとどまらず、作品が他者(観客)の視線と感性に晒され、何かがダンスを通して伝播する、もしくは伝染する、もしくは浸食する、つまり観ている僕たちが脅かされたり、揺さぶられたりする作品を立ち上がらせてほしいと願う。

そうした意味では、荒悠平の「一人より二人」や、審査員賞を受賞した鈴木優理子の「BORN / 2012」、そして若手振付家のための在日フランス大使館賞を受賞した岩淵貞太 / 関かおりの「Hetero」は、そうした舞台作品としてのダンスが成立する時空間を、各々個性的な方法と技量で作出し得ていたと思う。また、リリカルな作風で会場をあたたくしてくれた酒井幸菜の「スピカ」も、コンビネーションや空間を吟味し、さらに演出に手を加えることで、より強度と柔軟性を有した作品足りうる可能性を感じさせてくれた。

今、この島国では、至るところでダンスが溢れ返っている。

けれど、まだ見ぬダンスはそう多くはない。

手垢にまみれたダンスではなく、荒削りでも、瑞々しいダンスが見たい。

前田圭蔵 (NPO 法人 リアルシティーズ 理事)

岩淵貞太 / 関かおり「Hetero」は、自分たちの身体と真摯に向き合いながら緻密に作り上げられたデュオ。完成度が抜きん出ており文句なしの受賞だった。

鈴木優理子「BORN / 2012」は、身体の動きと感情とのズレをポップなタッチで描き出した。ゲーム感覚の楽しさがある。

動きの独特の肌触りが印象的な荒悠平など、受賞作以外でも捨てがたい魅力を持つ作品は多かった。

これからも既存の枠に縛られない新しい表現を期待する。

浜野 文雄(新書館「ダンスマガジン」編集委員)

ダンスを「踏み外して踊る」身体を見たい。

しかし、賞を一つの“切っ掛け”=幸運の場として、挑戦する身体(の潔さ)には優劣はない筈だ。

個人的な総括を言えば、「ダンスは(終わることなき)冒険、実験である」ということが、昨年よりも更に後退して、忘れられつつあるのか、と疑わせる結果であった。

それを見届けることの重責を更に感じた2年目でした。

室伏 鴻(舞踏家・振付家)

今年もまた、横浜ダンスコレクション EX2012 では、日本の、そして、アジアのコンテンポラリーダンスの大いなる展望を見ることができた。

受賞者の選考に際しては、審査員全員と大変建設的かつ有意義な意見交換ができた。

横浜ダンスコレクション EX2012 コンペティションIにおいて、岩淵貞太 / 関かおりは、若手振付家のための在日フランス大使館賞を受賞し、与えられた6ヶ月間にわたるフランスでのレジデンス活動を通して、彼らはダンスやヴィジュアルアートでの様々な新しい経験を積むのみならず、作品・舞台における身体の緊張を軸とした振付の研究をより一層展開することができるでしょう。

レベッカ・リー(横浜日仏学院 院長)